

「ダバオ・フロンティア史」にかんする現地調査 (1982-85 年) 再訪

早瀬 晋三[†]

Field Research on “Davao Frontier History” in 1982-85 Revisited

Shinzo Hayase

I conducted the field researches on “Davao Frontier History—Focusing on the Relations between Japanese Manila hemp cultivators and the Bagobo tribal people on 20 January-1 March and 25 April-13 May 1982, 10-30 December 1984, and 19 March-27 July 1985 in Davao, southeastern Mindanao, the Philippines.

This paper first introduces the changes of the Japanese cemeteries in Davao from 1980s to today (29 January 2020). Next, from the researches conducted in various places of Japan such as Okinawa as well as Davao in the first half of the 1980s, I would like to tell about what I couldn't write at that time, and there are things I can't write (I don't understand) even now. And finally, I would like to clarify the reading of the names of Hiroji Kamohara (popularly known as Koji Kanbara) and Gizo Furukawa (popularly known as Yoshizo Furukawa), who are the authors of the two most important books on “History of Davao” written by Davao residents before the war.

〈はじめに〉

1982 年 1 月 20 日～3 月 1 日, 4 月 25 日～5 月 13 日, 84 年 12 月 10～30 日, 85 年 3 月 19 日～7 月 27 日に, 南部ミンダナオ島東南部のダバオなどフィリピンで, 「ダバオ・フロンティア史—日本人マニラ麻栽培者とバゴボ族との関係を中心として」という題目で現地調査をおこなった。最初の 1982 年の調査は 84 年 5 月にマードック大学 (西オーストラリア州) に提出した博士論文 (“Tribes, Settlers, and Administrators on a Frontier: Economic Development and Social Change in Davao, Southeastern Mindanao, the Philippines, 1899-1941”) のため, 3 度目の 84 年の調査は翌年の 4 度目の数ヶ月間の住み込みの予備調査のためであった。当時のダバオは治安が悪く, 至る所に銃を構えた兵士のいるチェックポイントがあり, 装甲車が行き交っていた。戦前マニラ麻 (植物名アバカ) 産業を中心に, 2 万人の日本人入植者とその家族などが暮らす, 満洲国を文字った「ダバオ^{クオ}国」は, 日本の敗戦によって日本人が送還され崩壊した。戦後は, アメリカの大規模農業会社によるバナナなどの果樹プランテーションが広まった。70 年代になると, 大地主, プランテーションの打倒を目指す新人民軍 (NPA: New People's Army) や, イスラーム教徒の自治・分離独立を訴えるモロ・イスラーム解放戦線 (MILF: Moro Islamic Liberation Front) などによる反政府活動が, ダバオ周辺で活発になった。80 年代には, 農産物の市場価格が下落してダバオ経済が不振になり, 犯罪が横行し貧困者

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

が増加した。ダバオ市は山岳部を含む世界最大といわれる 2,400 平方キロの広大な行政面積をもち、毎月 100 人が殺害されたといわれるほど治安が悪化した。

1982 年と 84 年の調査のときは、郷土史家のコルシーノ (Ernesto I. Corcino) さんのお世話になった。とくに当時ミンタル (ダバオ市街地から西、北へ約 10 キロ) の中心地からすこし離れた日本人墓地はひとけがなく、アブと蚊の攻撃にさらされた筆者を、ゲリラなどの攻撃からも守ってくれた。85 年に下宿したカリナン (ミンタルから北へさらに約 10 キロ) でも、殺害事件があった。下宿は、日本占領初期の 41 年暮れに在住日本人が結成した義勇軍によって殺害されたフィリピン人医師 1 人、歯科医師 2 人、元日本人学校教員 1 人のうちの医師の名を冠した通りにあった [早瀬, 2012 年, 211 頁]。下宿の夫妻はともに日本人入植者男性と先住民であるバゴボ女性とのあいだに生まれ、息子 3 人、娘 2 人がいた。現地調査にあたって、主人のカガワ・イサムさんと家族、親戚、友人がつねにボディガードしてくれた。通常、「謝辞」は文末に書くが、当時の事情が事情だっただけに、まず、コルシーノ家とカガワ家のみなさんに感謝のこたばを述べたい。加えて、マニラでの宿泊と憩い、議論の場を提供してくれた寺見元恵さんとその家族、沖縄ではダバオのシラワンで 23 年に生まれた泉政敏 (伊豆味正敏) さんに感謝したい。戦前に沖縄で生まれ育ちダバオに渡航した一世とのインタビューでは、一世は標準語を聞いて理解できても、一世の話すことばは筆者には理解できず、二世などの通訳が必要だった。鹿児島などでの調査でも方言がわからず、同じようなことがあった。なお、82 年の調査はマードック大学の研究助成金、84-85 年の調査はトヨタ財団の助成金を得て可能になった。感謝したい。

30 数年前の調査について書くことになったのは、当時は東南アジア史研究の一環として「ダバオ・フロンティア史」に関心があって、博士論文の主題の「先住民、入植者、行政官」の順番通り、まずは先住民の調査を優先した。日本人入植者については背景にすぎなく、深入りして調査をしたり、書いたりすることはしなかった。だが、その筆者の体験が、いまとなつては、ダバオの日本人移民研究にとって貴重な「原資料」になることを、若い人たちの研究から気づかされた。思い返せば、調査した 1980 年代前半は、戦後ダバオから引き揚げた日本人にとっても、ダバオに残された混血二世にとっても、転換期であった。また、40 年近く前に調査したミンタルの日本人墓地は、そのときにあった個人墓 66 基がまったくなくなり、キリスト教徒フィリピン人の墓地に様変わりした。日本政府もフィリピン政府も、当時は日本人墓地の保存に関心がなかったが、近年建てられた慰霊碑には日本大使館やダバオ市長、のちに大統領になるドゥテルテ (Rodrigo Roa Duterte, 1945 年-) の名が刻まれている。その変化が、なにを意味するのか、40 年間近く、断続的にダバオをみてきた者として書く必要を感じた。

本稿では、まず 30 数年前と 2020 年 1 月 29 日に訪れたときの日本人墓地の変化を紹介し、つぎに 1980 年代前半にダバオと沖縄など日本各地でおこなった調査から、日本人移民について、当時書けなかったこと、いまも書けない (わからない) ことがあることを伝えたい。そして、最後に戦前のダバオ在住者が書いたもっとも重要な 2 冊の大部の「ダバオ史」の著者、蒲原広二と古川義三の姓名の読みについてはっきりさせたい。

1. ミンタル日本人墓地

1982年にミンタル日本人墓地を調査し、その記録をマニラの日本大使館に報告し、「ダバオ会」（戦後、ダバオからの引揚者が1964年に結成した親睦団体「ダバオを愛する会」を69年に改称）の「会報」『ダバオ』No. 32（1983年9月1日、59-65頁）に掲載した。85年におこなった補足調査でわかったことは、「ダバオの日本人墓地調査（2）」（『ダバオ』No. 38、1986年8月1日、71頁）として報告した（巻末に、再掲載する）。ダバオ会について詳しくは、[早瀬、2012年、第8章] [飯島、2013年]を参照。当時、ダバオには日本領事館があって、磯野領事を訪ね、調査の趣旨等を説明した。磯野領事の後任の古田保領事が「私はマニラにも駐在していたが、ダバオがそのように日本と関係が深いとは思ってもみなかった」と語ったように、領事館の関心は低かった[『日比友の会新聞』第2号、1984年12月1日]。

1982年当時、ミンタル日本人墓地は、その名の通り、日本人の墓が中心で、現在も慰霊の中心となっている「在留先亡同胞霊塔」の周囲に、個人墓などが点在していた。68年から「ダバオ会」が墓参団を組織して8月にダバオを訪れるようになって、ダバオ在住混血二世らとの交流がおこなわれるようになり、日本からの墓参団が訪れる前にミンタル日本人墓地を清掃するようになった。



写真1. 1980年代のミンタル日本人墓地 [ダバオ会、1988年、368頁]

1985年の敗戦40周年に、「ダバオ会」の活動が活発になった。ミンタル日本人墓地の「在留先亡同胞霊塔」の側に、福島支部は「戦争犠牲者の慰霊」（通称「福島塔」）、沖縄支部は「沖縄の塔」を建立した。さらに50周年の95年に「先亡日本人供養之塔」を建立した。



写真2. 建立当時（1985年）の「福島之塔」と「沖縄之塔」[ダバオ会，1988年，360頁]

当時「ダバオ会」は1,500人余（沖縄743人，沖縄以外769人）の会員・非会員のダバオ関係者を把握しており，その半数は沖縄に居住していた。年1回の全国各地で開催された懇親会と年2回発行の会報『ダバオ』を基本的な活動とし，1972年には沖縄本島摩文仁の丘に「ダバオ之塔」を建立した。ダバオへの墓参団は，沖縄ツーリストが企画し，68年のはじめてのときは横断幕に「AUGUST 1968 第一回慰霊団 比島ミンダナオ ダバオ JAPANESE DAVAO SOCIETY」と書かれていたが，その後は「DAVAO・OKINAWA FRIENDSHIP TOUR フィリッピン ミンダナオ島 ダバオ慰霊と親善の旅 沖縄県・沖縄県遺族連合会 ダバオ会沖縄支部 沖縄ツーリスト」というものもあった[ダバオ会，1988年，337-41, 360頁]。「ダバオ会」は会員の「総意」を大切にしていたため，活動は限られたものになり，沖縄支部や福島支部は独自の活動をするようになった。なお，2001年に「ダバオ会」が解散した後も，「沖縄県ダバオ会」主催の墓参団は2019年まで続き，以後有志によるものになることになった[『日本経済新聞』2019年7月29日，電子版]。



写真3. 戦後はじめての元ダバオ在留日本人の墓参団（1968年）[ダバオ会，1988年，241頁]

もうひとつ、独自に活動する者たちが現れた。ダバオ生まれの二世の平原定志を中心として「フィリピン日系人友の会」が発足した。戦前・戦中にともに日本人小学校で学び、日本の敗戦後ダバオに残され、フィリピン人の日本人にたいする憎悪を一身に浴びて、苦難の生活を強いられた日系二世への支援が、「ダバオ会」では充分におこなわれないとの不満からであった。1983年11月3日に「ダバオ二世会」140人が参集して開催された第1回総会で「フィリピン日系人友の会（ダバオ支部）」の「会則」（1984年1月）が議決された。その目的は、「この会はフィリピン日系人との親善を深め、かつ、日系人子弟の教育の支援及び日本語修得に協力する」で、目的達成のためにつぎの6つの事業をおこなうとした。

- (1) 高等学校以上の進学に対し、教育資金の援助を行う。
- (2) 研修の為、日本留学を希望する者に対し物質的援助を行う。（留学の便宜を計る）
- (3) 日本語の修得に協力する。
- (4) 相互の親善の為交流を行う。
- (5) 日本人の安全且つ健全なフィリピン観光旅行に協力する。
- (6) その他目的達成に必要な事項。

正会員は「この会の目的に賛同し戦前フィリピン・ダバオに在住した日本人」、賛助会員は「この会の目的に賛同し、入会した上記以外の日本人」、名誉会員は「この会の運営に功績のあった上記二会員の内、総会で推薦された者」とした。

発足後の「フィリピン日系人友の会」の活動は、『日比友の会新聞』第1号（1984年3月1日）および第2号（1984年12月1日）からわかる。

「フィリピン日系人友の会」の発足をうけて、奨学資金を実質的に支援する賛助会が1984年3月に結成され、60数名が賛助会員になり、その会費は100万円に達し、1984年奨学金として2回にわたり計30万円をフィリピン日系人会に送った。賛助会の会長は歯科医師会理事で、その活動は東京歯科医師会副会長であった平原会長から督促されてのものだった。

1984年8月19日に「フィリピン日系人友の会」の平原会長ら理事5名を含む29名が成田空港から5泊6日のダバオ旅行に旅立った。その目的は、同年5月13日に再選されたアルツーロ・ハギオ会長ら「フィリピン日系人会の新理事等と親しく話し合い、彼等の考え方や会の運営を正確に把握することや、現地日系人の現状、特に日本語学校（日曜学校）、そのほか日系人の生活取材など、盛り沢山なものであった」。

『日比友の会新聞』第2号で、平原会長は「日系人支援は無意味という意見について」と題して、つぎのように回答している。会が発足して1年が経ち、「頑張れという激励の言葉より、支援する価値のない相手に無意味な援助は止めよ、そのほかにも多くのご批判をいただいた」。「確かに日系人の中には、我々の善意をむさぼり取ろうとする悪い者もいる」と認めながらも、「日本軍の侵した残虐行為の報復を受け、辛うじて生き延びた者達がいまだに窮乏生活を余儀なくされている」とし、「フィリピン残留孤児を含め、政府の早急な支援処置を心より求めて止まない」と結んだ。このことから、会員の「総意」を基本とする「ダバオ会」が日系人を支援できなかった理由がわかる。

受け入れ側の「ダバオ日系人会（Davao Nikkei-Jin Kai）」のほうでも、さまざまな意見があった。

理事の役職と言語については、つぎの通りで、会長、副会長のひとは日本語を話すことができた：会長「日本語・タガログ語」、理事長「英語・タガログ語」、副会長「日本語・英語・タガログ語」、副会長「タガログ語、英語」、事務「英語・タガログ語」、会計「英語・タガログ語」、副会計「英語・タガログ語」、広報官「タガログ語」。日本の敗戦時には幼く、その後フィリピン人の母の下で育って、日本語を話す機会がなかった者もいる。そのほか、母親の母語などを話すことができた。「ダバオ日系人会」は1980年5月10日に4支部、3,000人以上をもって設立され、“PARTIAL LIST OF NESEI MEMBERS”には235名の日本名、フィリピン名、職業、住所が記されている [Davao Nikkei-Jin Kai, 1980]。

この「フィリピン日系人友の会」の活動、願いは、日本フィリピンボランティア協会やフィリピン日系人リーガルサポートセンターへと引き継がれた。前者は、1985年にダバオに日本語学校を開設して日系人会への支援をはじめ、94年にカリナンにオープンしたフィリピン日本歴史資料館を支援し（2020年1月23日にリニューアル・オープン）、2002年にはミンダナオ国際大学を開校した [https://www.jpva.org/about.html 2020年4月9日アクセス]。後者は、03年に「日系人のアイデンティティの調査、日本国籍取得等の法律問題の解決、生活の向上、教育等の支援」をすることを「使命」として設立された [http://pnlsc.com/pnlsc/index.html 2020年4月9日アクセス]。

しかし、これらの日系人への支援は、ダバオ在住フィリピン人との友好・親善には結びつかなかったようで、1990年代に日本人が建立した慰霊碑はつぎつぎに壊された。まず90年に戦前からあった「在留先亡同胞霊塔」の裏面、91年に「戦争犠牲者の慰霊」（「福島塔」）が壊された。96年2月に壊された「沖縄の塔」は改修後の11月に再度壊された。戦前の26年に「ダバオの父」太田恭三郎を記念してミントル小学校に建てられた碑の一部も99年に壊された [早瀬, 2012年, 238-39頁]。敗戦にともない、民間日本人推定3,700人を含む1万人余が収容されたダリアオンでは、記録に残る死亡者734人のうち10才未満の子どもが半数近くの355人であった。遺骨はドブガン墓地（ミントルの数キロ手前）に移され、「ダリアオン墓地から移した遺骨埋葬の場所」と手書きされたコンクリート製の簡素な碑から86年に沖縄支部によって「ダリアオン収容所内戦没者 供養之塔」に改修されたが、いまは写真5のように碑板のないのっぺらぼうなものになっている [早瀬, 2012年, 229, 233頁；ダバオ会, 1988年, 359頁]。この碑板は2005年にまだあったことが、『まにら新聞』の連載「戦後60年 慰霊碑巡礼第1部ダバオ・セブ編」（2005年1月2-6日）からわかる。



写真4. 「ダリアオン収容所内戦没者 供養之塔」[ダバオ会, 1988年, 359頁]



写真5. 「ダリアオン収容所内戦没者 供養之塔」(2020年1月29日筆者撮影)

1982年の調査から2020年1月29日に再訪するまでのミンタル日本人墓地の変遷についても、この『まにら新聞』の連載からわかる。戦前に日本人経営のアバカ農園で働き、墓地の維持管理を手伝っているという当時86才のフィリピン人は、戦前は100基を超える墓石があったが、戦後はフィリピン人に「解放」され、日本人の「墓石はダバオ市当局の手で次々に取り壊された」と語り、つぎ

のように続けた。

「経済大国日本」の存在が比で注目されるようになった一九八〇年代には、旧日本軍が残したとされる「山下財宝」を探すため、日本関係の慰霊碑や墓を壊す財宝ハンターが横行。墓石の内部や土中に財宝が隠されていると信じるハンターは、わずかに残っていた戦前の墓を掘り返し、墓石を割った。

同じような現象は、ルソン島北部の山岳地帯のバギオの日本人墓地でもみられた〔早瀬，2019年，5頁〕。「山下財宝」とは，山下奉文大将率いる日本軍が敗戦時に，フィリピンのどこかに埋めたとされる莫大な埋蔵金のことで，フィリピンでは広く知られている。

なお，ダバオに先んじて，バギオでは1972年11月に厚生省の遺骨収集団の一員としてバギオを訪れ日系人の存在を知った者らが「愛のサンパギータ友の会」を組織し，設立7年目の79年2月に会報『愛のサンパギータ』を創刊した。会の信条は，「(一) フィリピンバギオ市在住の三百世帯千五百人の日系人の存在，実態を調査，研究し，日系人への支援活動を推進する。(二) 愛と思いやりの心を育成を図る。(三) 国際交流，国際親善に寄与する。」であった。71年11月にバギオのセント・フランシス教会に赴任したシスター・テレシア常世海野(1911-89)が日系人を探し出し，物心両面の援助をしていたことから，「バギオ日系人会」を組織，提携して活動した〔『愛のサンパギータ』創刊第1号，1979年2月10日〕。

2020年1月29日にミントル墓地を訪れたときには，キリスト教徒フィリピン人の墓で埋め尽くされ，足の踏み場もないような状況になっていた。日本人に関係するものは，建立されたと思われる順に，つぎのものがあった。□は，判読不明の文字を示す。

(1) 「在留先亡同胞霊塔」



写真 6. 在留先亡同胞霊塔 (2020年1月29日筆者撮影)

- (2) (正面)「三〇人先亡者慰霊〇」
(右側面)「紀元二千六百年記念」
(左側面)〇〇〇三州人会建之



写真 7. 三州人先亡者慰霊碑（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）

- (3) 通称「福島の高」
(正面上)

FOR ETERNAL PEACE

戦争犠牲者の慰霊碑

- (正面下右)

この慰霊碑は、この地が、第2次世界大戦の戦前戦中に、多くの日・比両国の人が、その生命を捧げた地であることを示すものである。

われわれはここに、これらの御霊が、永遠に安かれと祈るとともに、日・比両国の恒久の平和を祈願して止まない。

- (正面下左) [同, 英文]

(裏面)

建立

昭和 60 年（1985 年）8 月吉日

この碑は日本全国のダバオ会員の佐苦志のよって建立されたものである。

ダバオ会福島県支部



写真 8. 左が「福島之塔」、右が先亡日本人供養之塔（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）

(4) (正面)「先亡日本人供養之塔」

(裏面)「一九九五年三月建立 在比日本国大使館」

(5) (正面)「沖縄の塔」「一九九七年七月三十日□□ 沖縄県知事大田昌秀」



写真 9. 「沖縄の塔」(2020 年 1 月 29 日筆者撮影)

(6) (正面)「比国日系人会貢献者之塔」

(裏面) 比国を愛し比国人と親しみ 故郷よりも故郷として支えて 今ここに眠る

平原定志 ダバオ／東京都 1921.6.16～1988.11.25

内田あやこ 東京都 三鷹市 1933.6.16～1999.3.4

萩尾行利 ARTURO HAGIO 1927.11.11～2000.5.14

阿部 次郎 RODOLFO TUTOR Sr 1939.10.29～2000.11.20

豊口 修 ダバオ／東京都 1936.1.12～2002.3.28

羽間 正樹 ダバオ／東京都 享年◇1995年5月

香川 勇 KAGAWA ISAMU ISAME MAING Feb. 8, 1934-Aug 1, 1993

村上 ハル子 MURAKAMI HARUKO MARIA OBEDENCIA Sept. 15, 1938-July 25, 2004

[一部はっきりしないものがある]



写真 10. 比国日系人会貢献者之塔（2020年1月29日筆者撮影）

(7)「無憂」の碑

（正面の塔）「無憂 龍成」

（正面台座の上）「フィリピンを愛し ダバオを愛した あなたが今ここに」

（同，下）[同，英文]

（正面台座左）「“Every human being is my brother, my sister, my child...” Rodrigo R. Duterte」

（正面台座右）「人類は皆家族 ロドリゴ R ドゥテルテ」

（右側面）「BRGY.CAPT.RAMON M.BARGAMENTO III MINTAL, DAVAO CITY」

（裏面）「我が人生に憂い無し 二〇一三年一〇月四日 網代正孝」

（ゲート左）「憂い無しの碑」

20 世紀，麻づくりで賑わう日本人街

戦争による悲劇，故郷ダバオを訪れる方達。

21 世紀，新しい日比関係を築く日系人会と

日本フィリピンボランティア協会（JPVA）

そして 22 世紀は――

フィリピンを愛し，ダバオを愛した，あなたは

「いつの時代の人」なのでしょうか。

ミンタルの縦のいのちに触れ、先人たちに学び、
我が人生の「憂い無し」を見つめる。さらに日比友好の絆と相互補完事業への思いを深め、日
比の明日を開く
聖地ミンタル。

2013 年ダバオと日本の友好の歴史を刻む碑として
ドゥテルテダバオ市長とダバオ市民の皆さんが、
この碑を建立しました。

「憂い無しの碑」が日比の市民の皆さまにとって
「人生の輝きと友好の絆を深める碑」であることを祈念します。

我らが永遠の地 フィリピンダバオに
私達の人生をささげる

2013 年 10 月 4 日

フィリピン日系人会

日本フィリピンボランティア協会

会長 アントニーナ B. エスコビリア

会長 網代 正孝

(ゲート右) [同, 英文]

(柵右側面) 「「無憂」の碑 建立のいわれ」

日比親善の発祥の地・ダバオのミンタルには、大正・昭和の初めに日本から移住し、麻づくりで成功した多くの先人たちの日本人墓地があった。当時の日本人のお墓は整理され、お骨は「無憂」の碑の後方の納骨堂に納められている。室内には氏名が刻字されているが、その人たちは、どんな思いで生涯を見つめたのであろう。生涯を終えるとき、“わが生涯に憂い無し”という「無憂」の気持ちが生まれたに違いない。

ダバオは麻づくりで栄えた街で、日本との華やかな交流があった。当時の生活はカリナンの歴史資料館で偲ぶことができる。

親日家のドゥテルテ大統領にとって、ダバオにおける日本との親睦交流の歴史は周知のことであり、ダバオ市長だった 2013 年には、東京・調布市の延浄寺を訪問している。そこに掲げられていたのは「無憂」のボー [board] だった。

「無憂」とは自分を見つめ、私の生涯を“憂いなし”と思いこむことである。その意味を理解したドゥテルテ市長は、日本訪問の記念として日本側の願いを受け、昔を偲び、今の自分を見つめる「無憂」の碑を建立し、寄贈することになった。

「無憂」の碑には不思議なパワーがある。自分の人生を見つめ、日比の親睦交流を進める呼びかけのパワーである。ここで瞑想すると、より良い人生を歩めるパワーを受けることができる。高齢者には“わが生涯に憂い無し”の心が生まれやすい。ここは、日比の先人達のパワーが流れているのであろう。

ダバオのパワースポット・ミンタル。「無憂」の碑を前のあなたは今、何を想うのだろうか。

2019 年 日本フィリピンボランティア協会初代会長 延浄寺・住職・網代正孝

(同, 右) [同, 英文]

(裏に納骨堂)

（納骨堂内）

青根外世子	安齊 包	石神角太郎	市来勝美	出井ノブ
稲垣克子	上繁 一	牛島清之	内田五十八	内田トミ子
梅宮マサ	浦住吉蔵	大城孝蔵	太田雪子	大東万郎
津田乙松	岡田末武	岡村昭蔵		
落合仁市	長男真一	数井豊次郎	日下部正義	国近祐三郎
高寺邦敏	小平次雄	小平政子	小玉 琢	昆 茂乃
昆 雅代	佐々木恒夫	島田伝吉	瀬戸清次郎	谷川福一郎
永田伝三郎	中堅秋作	成富元吉		
野中タケ	橘詰清太郎	林 敦美	原口信道	平尾茂之
平栗 諫	平栗マキ	平山茂逸	広江国資	広野吉助
増田四郎	村沢こと	森 広男	吉川米造	脇坂房子
渡辺西吉	渡辺幸之	實誉一道		
斉藤 光	斉藤若人	斉藤 久	鈴木重吉	菅野宇兵
菅野金平	菅野右エ門	菅野吉次郎	山岸友吉	菅野明雄
菅野富紀子	塚田拓男	塚田令子	春原衛子	

出生 明治三十年十二月四月

死亡 昭和二十年九月一日（四九才）

阿座上勝一

出生 昭和七年六月四日

死亡 昭和十二年四月二日（六才）

阿座上達朗

本籍地 山口県美祢市於福町金山

居所 ミンダナオ島ダバオ市ダクダオ耕地

65 名の連名のうち最後の 3 名を除いてすべて、巻末資料にある、筆者が 1982 年に調査したもののなかで日本人の姓名を記入したものと一致する。姓名がはっきりしないものは、このなかにはない。成富元吉は、「成富元吉長女」で、本人ではなく娘の墓である。最後の 3 人のうち最初の 2 人の姓名は活字体で刻字されているが、明らかにほかのものと大きさが違い、追加されたものである。最後の 1 人は、筆記体で刻字され、明らかに違う。写真 12 にあるように、「阿座上勝一」「阿座上達朗」のものは、65 名連名の 2 枚の大理石板の下に別の大理石板に刻字されている。巻末資料と一致する 62 名については、なんの説明もない。



写真 11. 「無憂」の碑。後ろに納骨堂（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）



写真 12. 納骨堂内（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）

(2)「三〇人先亡者慰霊□」は 1940 年（紀元 2600 年）に建立されたままであるが、(1)「在留先亡同胞霊塔」および(4)「先亡日本人供養之塔」は明らかに修復されたもので、(3) 通称「福島の塔」は碑板以外、修復されている。82 年の調査から、(1) は修復前には「昭和三年四月 有志建立」と刻まれていたこと、(2) は「三州人先亡者慰霊碑」と読めたことがわかる。『比律賓年鑑（昭和十六年度版）』（大谷純一編）によると、薩摩、大隅、日向の 3 州出身者が 35 年に「ダバオ三州人会」を結成し、40 年に「先亡者慰霊碑」を除幕したとある。判読不明の 3 文字は「ダバオ」と考えられる [507 頁]。(5)「沖縄の塔」は 96 年に 2 度壊されたものを、翌年改修したものである。(6) は裏面にある 6 名の貢献者に、2 名が付け加えられているが刻字が一部はっきりしない。(7) は 2013 年に建立されたものに、19 年に説明板が加わっている。

このほか、1983 年に建立されたもの（1932 年と 45 年没）と 2005 年に死亡した個人墓がある。

日本フィリピンボランティア協会（JPVA）初代会長網代正孝とダバオとのかかわりについては、調

布市の延浄寺（浄土真宗本願寺派）のホームページで、つぎのように説明されている：「25年前フィリピンミンダナオ島ダバオへの墓参団に同行した当寺住職が日系人の教育支援を始めたことがきっかけで、これまで小学校・ハイスクール設立を支援し 2002 年にミンダナオ国際大学を創立させました」[<http://enjoyoji.com/activity/jpva> 日本フィリピンボランティア協会／2020 年 8 月 2 日アクセス]。

ミントル小学校にある太田恭三郎記念碑には、新たに説明板がフィリピンと日本フィリピンボランティア協会によって建てられた。2003 年に国家歴史研究所（National Historical Institute）によって建てられたものは、太田恭三郎が 1876 年 2 月に兵庫県で生まれ、1907 年 5 月 3 日にアバカ栽培の太田興業株式会社を設立し、さらにミントル・プランテーション会社、リバーサイド・プランテーション会社、タロモリバー・プランテーション会社、ギアンガ・プランテーション会社を設立して、ダバオでの日本人の発展に貢献し、17 年 10 月 31 日に京都で亡くなった、とタガログ語で説明している。



写真 13. 太田恭三郎記念碑（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）



写真 14. フィリピン国家歴史研究所が設置した歴史説明板（2020 年 1 月 29 日筆者撮影）

日本フィリピンボランティア協会が2017年に設置したものは、日本語と英語でつぎのように説明している。

太田恭三郎（1876-1917）

1876年2月に日本の兵庫県で生まれる。1917年の10月に日本の京都で亡くなる。

太田はルソン島のベンゲット道路工事に従事した日本人労働者をミンダナオ島ダバオに導き、ミンタルにアバカ麻栽培を行う太田興業株式会社を1907年に設立した。この会社はダバオの農業開発を推進する原動力となり、ダバオはこのアバカ麻栽培を中心として発展し、ミンダナオ島の経済発展にもつながった。ダバオの日本人人口は2万人にも達した。第二次世界大戦という不幸な歴史も存在したが、現在の日本とフィリピンの友好な関係を考えるとき、太田はその土台形成という点で大きな役割を果たした。

彼の業績を讃え、永続する日比の友好を祈念する。

（「ミンタル」の地名はバゴボ族首長の名で地名でもある「インタル」の「イン」を「民」として「民多留」（人々が^{ママ}多々く住む）と太田興業株式会社が命名した）。

日本フィリピンボランティア協会

2017年8月12日

2. ダバオの日系人

1939年のフィリピンの国勢調査では、1万7,888人の日本国民（citizen）が居住し、日本国民の男性の日本国民の妻は4,442人、かれらの子どもは男4,663人、女4,289人、計8,952人で、フィリピン公民（citizen）の妻は874人、かれらのあいだに生まれた子どもで日本国民と報告された者は男385人、女355人、計740人、フィリピン公民と報告された者は男839人、女779人、計1,618人だった。そのうちダバオは、日本国民の妻3,007人、その子どもは男3,328人、女3,043人、計6,371人で、フィリピン公民の妻は269人、その子どもは日本国民と報告された男135人、女132人、計267人、フィリピン公民と報告された男262人、女225人、計487人だった。フィリピン公民と報告された者の割合はフィリピン全土で68.6%、ダバオで64.5%であった。日本は父系血統主義をとっており、父親が日本国民の場合、子どもはすべて日本国民になった。したがって、フィリピン公民と報告された子どものフィリピン公民の母親との婚姻は、正式に日本領事館等に届け出ている内縁関係であったか、いわゆる「現地妻」であったと考えられる。フィリピン公民と報告された者の割合が、全土よりダバオのほうが低かったことから、ダバオで届出をしていない婚姻の割合が全土より若干少なかったことがわかる。

日本国民は日本の敗戦後日本に送還されたが、日本人男性とフィリピン人女性とのあいだに生まれた子どもは、16歳以上は送還され、16歳未満は母親の下でフィリピンにとどまったといわれる。日本の敗戦後の混乱で、日本国民やフィリピン公民を証明するものがあつたかどうかかわからないし、厳密に調べられたかどうかかわからない。

海外在住日本人で現地の女性と結婚した男性は、「よほど物好き」「変わり者」などと言われること

があった。かれらのなかには、日本人との交流を断った者もあり、「変わり者」と呼ばれる一因は、日本人社会から離れていったことにある。1934年に南洋庁が置かれたパラオ・コロール島に設立されたパラオ熱帯生物研究所（Palao Tropical Biological Station）で起こった研究員と首長の娘との恋愛は、同僚に「自由主義」とよばれたが、所長が激怒し、「自由主義」者が研究所の紀要に論文を発表することを禁じたという。「当時、コロール在住のエリート層において「島民」との恋愛や結婚はいわばタブーであった」[坂野，2019年，192-93頁]。研究員らが出した同窓会誌『岩山会会報』を読んだ科学史研究者の坂野徹は、つぎのように述べている。

当時のコロール（ミクロネシア）の料理屋（料亭）は多くが娼楼をかねていたが、これは、統治上の理由から、南洋庁が、日本人と「島民」の結婚や肉体関係を歓迎しなかったこととも関係している。現実には、日本統治時代、日本人と現地住民とのあいだに多くの子どもが生まれているが、元田[茂研究員]によると、「島民の女を相手にすることは統治に害ありとして罪悪視」される一方、多くの「南洋紳士は料理屋に精勤」していたのだという[坂野，2019年，158-59頁]。

その後その研究員は、研究者の道を進まず、1938年に発足し研究員は無条件で会員になることができた同窓会岩山会の41年9月の会員名簿にも名前はなく、研究所関係者と音信不通になった。当時の所長が63年に亡くなり、77年に「自由主義」者は会員に加わった[坂野，2019年，338, 341-42頁]。38年に男爵の位を継いだ「自由主義」者の代償は、あまりに大きかった。

ダバオは日本の統治下にあったわけではないが、2大マニラ麻会社であった太田興業株式会社や古川拓殖株式会社の社員で現地の女性と結婚した者の話は聞かない。「ダバオ会」が作成した1982年10月1日現在の「ダバオ関係者名簿」には1,500名余の名が、住所とともに「耕地／出身校」が書かれているが、明らかにフィリピン人の名前とわかるものはほとんどない。日本人名の混血二世は何人かおり、話を聞くことができた。

1939年のフィリピンの国勢調査で、日本国民を父、フィリピン公民を母にもつフィリピン公民として報告された487人について、ダバオでも帰国後訪れた沖縄など日本各地でも訊ねたが、大きな成果はなかった。ダバオでは、バゴボの移動を把握するために系図を集め、日本人との婚姻も系図から明らかになったが、奴隷階級出身だと系図がピタリと止まり、それ以上遡ることはできなかった[早瀬，2003年，付録3]。80年代当時、日系人会で活動する人びとは、戦前・戦中に日本人小学校に通い、日本語が話せる人びとが中心で、日本人小学校に通わず日本語が話せない人びととの連絡はつきにくかった。たまにそのような人と連絡がとれても、話を聞くことはできず、なかには日本語も英語も、ダバオで広く話されるセブアノ語もタガログ語も理解しないイスラーム教徒もいた。おそらく、今日まで日系人として理解されてきた人びとは39年のフィリピンの国勢調査で日本国民を父、フィリピン公民を母にもつ日本国民の267人に含まれた者、つまり日系人の約3分の1中心だったと考えられる。だが、フィリピン公民と日本国民をあわせた754人のほとんどは、30年代生まれの戦前・戦中に小学生かそれ以下で、日本人小学校に通った者は当然日本国民と思っていただろうが、実態はよくわからない。68年から墓参団を組織して、集団で来るようになった元在住日本人を迎えたのも日本人小学校に通い、日本語が話せる日系人たちで、かれらは同時に小学校の同窓会を開催した。「同

じ日本人学校で机を並べた竹馬の友」で敗戦前後の逃避行中や収容所で亡くなった者が多くいることから、強い連帯感がある [『日比友の会新聞』第1号, 1984年]。39年度のダバオの日本人小学校11校の児童数合計1,814人のうち、「混血児」は208人(11.5%)であった [早瀬, 2015年, 64頁]。上記の通り, 39年の国勢調査で, 日本国民とフィリピン公民と報告された者のダバオの「混血児」の合計は754人で, 日本国民夫婦の子ども6,371人を加えた7,125人の10.6%にあたることから, フィリピン公民と報告された者も, 可能な限り, 日本人小学校に通ったのではないかと想像される。

ダバオでの女性比率は1919年まで3~5%ほどで, 女性の多くは当時「からゆきさん」とよばれた日本人娼婦と考えられるが, 第一次世界大戦中(1914-18年)の東南アジアの廃娼運動の高まりの結果, ダバオでも激減した。ダバオでは, 10年に日本人による娼館がはじめてでき, 最盛期には13軒が並び娼妓は18年に70人と記録された。その18年に日本人会は廃娼を決議し, 日本の外務当局も廃娼命令を発したことから20年には姿を消した。その後, 日本人遊郭跡地にフィリピン人によるものができ, 日本人による料亭も何軒かできたが, 25年にダバオ州が廃娼を決議し, 日本人経営の料亭も閉鎖した [蒲原, 1938年, 132-39頁]。

第一次世界大戦までにダバオに渡航してきた日本人のなかには, 現地の首長など有力者の娘と結婚, 土地を獲得し, 日本人によるアバカ栽培の発展に貢献して, 後に「成功譚」として語られるようになった者がいる。また, 「からゆきさん」との関係もあっただろう。いっぽう, 日本人人口の約半分を占めるようになる沖縄からの渡航者は, 大正末期から昭和初期にかけておこった「ソテツ地獄」とよばれた恐慌の影響もあって, 昭和(1926年)になってから多くなったため [早瀬, 1995年; 沖縄県, 2011年, 338頁], それまでに来た移民のなかで現地の女性と結婚した者は本土からの移民が多かったという印象になっただろう。だが, 生活に余裕のできた者は日本から妻子あるいは妻となる者を呼び寄せ, 34年以降の女性比率はダバオで出生した子ども(男女ほぼ同数)が増えたこともあって30%を超えた。いっぽう, 呼び寄せができなかった者のなかには, 廃娼の結果「遊ぶ」場がなく, 現地の女性と内縁関係になったり, 「現地妻」と暮らすようになったりした者がおり, 子どもができた。このような女性のなかには, 現地の有力者の縁者ではなく, 現地社会でも底辺に近い者がいたという話を聞いたが, 日本人男性についても, 現地の女性についてもよくわからない。

沖縄からの移民が現地の女性と結婚する傾向があったとする研究者と, そうではないとする研究者に分かれるが, 外務省通商局編『昭和十五年 海外在留邦人調査結果表』によると, フィリピン在住日本人の出生地別男女比は内地合計で男71.4%, そのうち沖縄は73.4%でそれほどかわらない。本籍地別はフィリピンなどで生まれた者を含むことから全体で7,533人増え, そのうち沖縄は3,634人(48.2%)であった。フィリピンの1939年の国勢調査で日本国民夫婦から生まれた子どもが8,952人と記録され, その大半が30年代にフィリピンで生まれたと考えると, フィリピンなどで生まれた者のなかに, 現地の女性とのあいだに生まれフィリピン公民と報告された子どもは含まれていないと考えられる(日本の本籍地はない)。総計では男1万2,100人(男女比62.9%), 女7,133人, 合計1万9,233人, そのうち沖縄は男6,389人(64.5%), 女3,510人, 合計9,899人(総計の51.5%)であった [早瀬, 1995年, 60-61頁]。なお, 沖縄を本籍地とする者への差別があったことから, 他府県を本籍地としている沖縄出身者も珍しいことではなかった。

[蒲原, 1938年] や『比律賓年鑑』の巻末の「人物紹介」で, 沖縄出身者は半数よりはるかに少な

いことから、沖縄からの移民のなかにプランテーション労働者が多かったことが考えられ、現地社会の底辺に近い女性と「結婚」（内縁関係、現地妻）していたのなら、あまり語られることはなく、現地の女性と「結婚」する「傾向があった」ということができる。既婚者を含む単身の日本人男性は、「からゆきさん」もフィリピン人娼婦も表からいなくなったことから、フィリピン人一般女性と関係をもつ機会が多くなったと考えられる。

南洋群島同様、ダバオでも現地の女性との結婚は好ましくないと考えられ、子どもを日本人小学校に通わせられなかった者は、日本人社会とも縁遠くなった可能性がある。1984年に沖縄で調査したとき、戦前ダバオで働いていた夫が亡くなった後、ダバオでできた子どもとその家族を呼び寄せた沖縄の正妻に会った。正妻とのあいだにできた子どもたちの了解を得て呼び寄せたという。ダバオから呼び寄せられた子どもとその子どもたちにも会ったが、戦前・戦中のダバオでの暮らしについては語らなかった。また、沖縄では何人かのフィリピン妻にも会うことができたが、インタビュー調査に応じてくれる人はいなかった。沖縄では、72年に除幕式をおこなった「ダバオ会」が建立した「ダバオ之塔」があり、毎年ほぼ5月15日（沖縄の施政権返還記念日）に慰霊祭がおこなわれるが、かのじょらは慰霊祭に出席しても、その後の懇親会には参加しないと聞いた。戦前の沖縄からの移民は、なにかと差別的に語られることがある。現地社会との関係が日本本土からの移民より近かったといわれることを、嫌がる人たちがいる。そういう人たちが口を揃えていることは、事実とは異なる場合がある。皆が皆同じことを言えば、研究者としては一度は疑ってみることも必要だろう。

沖縄からの入植者は、昭和に入ってからその後発組であったために、それまでのバゴボ人の土地への入植ではなく、バゴボ人以外の土地にも入植したため、バゴボ人との関係を中心に語られてきたものとは違う経験をした者が少なくない。子どもは成人に達していなく、なかには日本人小学校に通うことが困難な地域に入植した者もいた。〈はじめに〉で述べたように、一世のなかには日本語の標準語が話せず、日本本土からの入植者とコミュニケーションがうまくとれない者がいたし、日本人小学校に通っていない二世は「通訳」することができなかった。自ずと沖縄出身者のあいだでの交流が中心となっていき、戦後引揚げ後も独自の親睦団体としての「ダバオ会」沖縄支部があった。

なお、筆者の沖縄での調査については、『琉球新報』（1984年11月17日、朝刊）で紹介された。

当時は、日系人については本格的調査をせず、疑問に思っても深追いすることはしなかったが、わかったことから書いていったかつてと違い、今日ではわからないことまで含めて全体像から理解することが必要で、30数年前にわからなかったことも、なぜわからなかったのかを書く必要を感じた。だが、当時はインタビュー調査に応じてもらえず、そしてなにより、戦中・戦後苦難の人生を歩んできた人びとの利益にならなかつたり、かれらが話したがらなかつたりしたことをあえて書く必要はないと考えていた。

東南アジアや南洋群島のような海域社会では、「親しい間柄」の人びとからなる「親密圏」が形成され、頻繁に交流し、互いに助けあい、言動をともにする。複数の「親密圏」に属する人が「親密圏」をつなぎ、ネットワークを形成する。筆者が、カガワ家に下宿し、その一員に加えられ、ほかの人びとがそれを納得したのは、下宿の妻の父（日本人入植者）が岡山県出身で同郷であったからである。同郷であることを話すと、それ以上の質問はなかった。その後のインドネシアの北スラウェシやマルク諸島（香料諸島）でも、「親密圏」と「親密圏」を結ぶ人物を探し出すことによって、インタビュー

調査を広げることができた。

フィリピンの日系人・在住日本人については大野俊の一連の研究 [Ohno 2015] [大野, 2016 年] など、バギオの日系人については森谷裕美子の [森谷, 2016 年] など、南洋群島の日系人については 1979 年にミクロネシア連邦初代大統領に就任したトシオ・ナカヤマの伝記 [Hanlon 2014], あまり語られることのないオーストラリアの日系アボリジニについては [山内編, 2014 年] を参照。日本人と海外移住の歴史、現状の概略については [日本移民学会編, 2018 年] で理解でき、東南アジアについては第 8 章 (筆者執筆) でとりあげ、南洋群島については「コラム 11」で紹介している。

3. 蒲原広二と古川義三の姓名の読み

(1) 蒲原広二

蒲原広二は、『比律賓年鑑 (昭和十六年度版)』 (大谷純一編) には、「H. Kamabara」「ダバオ日々新聞社主筆、原籍佐賀県」「大正七年四月渡航」とある。『ダバオ邦人開拓史』 (ダバオ: 日比新聞社, 1938 年, 1580 頁) の著者として知られる。いっぽんには「かんばらこうじ」と読まれることが多く、『国立国会図書館著者名典拠録 明治以降日本人名 第 2 版』 (1991 年) でも、「カンバラ, コウジ 蒲原広二 日比新聞主筆「ダバオ邦人開拓史」」となっている。

佐賀県には「かもはら」と読む者が多く、疑問に思っていたところ、『日比新聞』第 1 号 (昭和 10 年 10 月 1 日) の唯一の英字記事に「By H. KAMOHARA EDITOR」とあった。H なら「ひろじ」と読むのではないかと思ったが、確証はなかった。幸い、「ダバオ会」がまとめた「ダバオ関係者名簿」のなかに、蒲原広二の妻の名前を見つけ、手紙で問い合わせたところ、1983 年 2 月 16 日消印の葉書で「かもはらひろじ」であるとの回答を得た。「本年は広二の七回忌を二月二十日にいたします」「文献、史料は全々持って来ておりません。戦争中 8 人家族で逃げてイカダでダバオ川を下って命からがら引揚げたものですから…」とあった。

蒲原が創刊号から主筆をつとめた『日比新聞』は、1935 年 10 月 12 日 (土) 以降、毎週土曜日に発行される予定であったが、創刊号がオーストラリア国立図書館に所蔵されているだけで、2 号以降の発行状況は確認できない。また、『ダバオ邦人開拓史』は、日比新聞社長、岡崎平治の「刊行趣意書」によると、日比新聞社「創立二周年を期し、之が記念事業として」「計画し、蒲原主筆を其の編纂の任に当らしめ、一年有余」を費やして完成した。「本書刊行の目的は、一は以てダバオ開拓の先輩苦心の跡を偲び、一は以て後輩及母国の青壮年に熱帯産業の実績を紹介し、南方雄飛の一助に資せんとするもので」あった。

(2) 古川義三

古川義三は、『ダバオ開拓記』 (東京: 古川拓殖株式会社, 1956 年, 693 頁) の著者として知られる。いっぽんには「ふるかわよしぞう」と読まれることが多い。上記の『国立国会図書館著者名典拠録』でも、「フルカワ, ヨシゾウ」となっている。

しかし、経済界では「ふるかわぎぞう」として知られている。『20 世紀日本人名事典』 (日外アソシエーツ, 2004 年) によると、「古川義三 (読み) フルカワ ギゾウ」の見出しの下、つぎのように記されている。

大正・昭和期の実業家 フィリピン・ダバオの開拓者

生年 明治 21（1888）年 6 月 15 日

没年 昭和 60（1985）年 8 月 11 日

出生地 滋賀県

学歴〔年〕 東京帝国大学卒

経歴 大正 3 年フィリピン・ダバオに古川拓殖を設立。マニラ麻産業に携わりダバオ商工会会長、日本人会会長を務めるが、日本の敗戦により事業が潰れる。戦後、ダバオ再進出を試みるが果たせず、昭和 38 年南米・エクアドルにマニラ麻会社を再建。日本人移民を受け入れて同国に繊維産業を興し、同国の経済開発に貢献した。著書に「ダバオ開拓記」がある。

また、『日本人物レファレンス事典 商人・実業家・経営者篇』（日外アソシエーツ，2017 年）でも、「古川義三 ふるかわぎぞう」とある。

古川義三には、1930 年に発行した『セカイ ヒトノゾキ』という本がある。古川は「ローマ字を国字に」という持論をもち、漢字の弊害を除去するものとして朝鮮語のハングルを評価し、仮名文字タイプライターを導入した〔古川，1956 年，614-18 頁〕。『セカイ ヒトノゾキ』は、漢字とカタカナで出版された。「チョサクシャ」は「フルカワ ヨシゾー」である。同書は、2014 年に郷里の滋賀県豊郷町で『世界ひとのぞ記 1928 年 2 月 10 日-1929 年 8 月 29 日世界 30 ヶ国旅行記 昭和初期世界旅行記』として復刻され、発行記念として「豊郷小学校旧校舎群歴史展」が開催されて、つぎのように紹介された〔<https://www.prerele.com/releases/detail/18295> 2020 年 4 月 1 日アクセス〕。

『世界ひとのぞ記』は、滋賀県豊郷出身の実業家、古川義三（ふるかわよしぞう）が昭和 5 年に著した、第一次大戦から第二次大戦の間の、昭和 3 年から 4 年にかけて世界 30 カ国もの旅をした貴重な世界見聞録。同氏は戦前にフィリピンで起業しており当時としては国際感覚にあふれる日本人だった。書中に描かれている旅には、やがて故郷である豊郷に東洋一とたたえられる学校の寄贈を私費で行った古川鉄治郎（ふるかわてつじろう）も一部同行しており、この郷土の名士の偉業は欧米をめぐる時の体験が背景にあるものと考えられている。平成 26 年に公益財団法人芙蓉会より復刻版が発行。

古川鉄治郎（1878-1940）は、義三の実兄で、叔父の伊藤忠兵衛のもとで育てられ、伊藤商店に勤め、丸紅商店の創業者のひとりとなった〔古川，1956 年，174-76 頁〕。

もう 1 冊、古川義三は出版するつもりで、その原稿が残っている。漢字は手書き、かなはカタカナでタイプされた原稿は、「Ⅰ. エクアドル国情」（A3 で 38 頁）、「Ⅱ. アバカ付 ラミー」（20 余頁）、「Ⅲ. エクアドルニアバカ導入」（50 余頁）、「Ⅳ. 私ノ見方。考エ方」（50 余頁）、「Ⅴ. 筆者」（100 頁弱）で、「36 私ヲ昭和 53 年度 日本一長者」で終わっている。「前書き」の最後で、本書を執筆するに至ったことを、つぎのように述べている。

著者ヲ依頼サレテ昭和 36 年（1961）AMAZON ニ ABACA 裁^{ママ}〔栽〕培ノ可能性鑑定視察ヲ

ナシタル ガ ECUADOR ニ ソノ可能性ノ高イ点ヨリ薦メラレテ ソノ翌年 ヨリ コノ ECUADOR ニテ ABACA ノ裁^{ママ}〔栽〕 培ヲ始メタ。

ABACA 産業ヲ斜陽化シテイル トワイエ ABACA 自身ヲ貴重ナル原料デ、ナルベク合理的ニ大量産出 シ、産業界 ニ尽スベキデ、筆者ノ長イ体験ヲ確カニ ABACA 産業ノタメニナリウルト アエテ 本書ヲ認メタル次第デアル。

エクアドルには、古川義三の銅像があり、「YOSHIZO FURUKAWA」と刻まれている。なお、アバカ産業については、[Hayase 2018] を参照。

古川義三は、1978 年度に「タダ同然で買った土地を住宅公団に売って、ポンと長者番付日本一に」[『読売新聞』1979 年 5 月 2 日] になった。「まいり」サイトには「ふるかわ ぎぞう」とある (<https://mairi.me/-/1094365> 2020 年 4 月 9 日アクセス)。訃報記事は、全国紙でみつけることができなかった。

これらのことから、「ぎぞう」が本名で、通称および著者名が「よしぞう」ということで落ち着きそうである。なお、滋賀県のどこかの博物館で、伊藤忠兵衛一族の系図が展示してあり、そこに「ふるかわぎぞう」と書かれていた記憶がある。

蒲原広二と古川義三の 2 冊の本は、戦前のダバオのことを知るための基本的文献である。しかし、ここで注意を要するのは、ふたりとも研究者ではないということである。蒲原広二は日本語新聞の主筆で、古川義三はマニラ麻会社の経営者である。それぞれの視点からまとめた信頼性の高い文献であるが、学術書ではない。学術的な議論をするためには、これらの文献を参考に、原資料にあたる必要がある部分がある。

〈おわりに〉

日本政府もフィリピン政府もダバオの日系人とその歴史に関心をもつようになったのは、東西冷戦終結（1989 年）とソビエト連邦崩壊（1991 年）後の歴史の政治化と無縁ではない [橋本編，2018 年 など]。日本と中国あるいは日本と韓国との関係が、日本の首相の靖国神社参拝問題などで悪化するなか、日本は東南アジアとの友好関係を築こうとし、中国や韓国が歴史問題で戦争中日本に占領・支配された東南アジアを含むアジアの問題にしようとしたのに対抗した。とくにフィリピンやベトナムにたいしては、南シナ海（2012 年にフィリピン側の公式名称は「西フィリピン海」になった）の領有権問題で中国と対立していたことから、安全保障上の問題でも連携しようとした。また、日本の労働者不足から日系人が注目され、1990 年 6 月に改定された日本の「出入国管理及び難民認定法」（入管法）で、「日系人」にのみ活動制限のない長期滞在が許可された。

2016 年の平成天皇・皇后のフィリピン訪問のときに戦後残された日系人（日本人父とフィリピン人母とのあいだに生まれた子どもたち）や 17 年のベトナム訪問のときに残留旧日本兵の家族（ベトナム人妻およびその子どもたち）と対面したのも、日本人ゆかりの人びとを通して友好関係を築こうとした外交戦略として理解できる [早瀬，2018 年 a] [早瀬，2018 年 b] [小松，2020 年]。また、日系人労働者に期待する日本の産業界があった。

いっぽう、1988年からダバオ市長を22年間余（1998-2001年の下院議員、2010-13年の副市長を除く）務め、16年に大統領に就任したドゥテルテのもとで、ダバオの治安は回復し、日本からの投資に期待した。ともに、その手段として日系人を通じた親善・友好に関心をもつようになった。

参考文献

- 愛のサンバギータ友の会『愛のサンバギータ』創刊第1号、1979年2月10日。
- 飯島真里子「沖縄におけるフィリピン引揚者の慰霊—摩文仁の丘「ダバオ之塔」の建立をめぐる」『移民研究』9号、2013年、79-96頁。
- 大谷純一編『比律賓年鑑（昭和十六年度版）』1940年。
- 大野俊「『日系人』から『残留日本人』への転換—フィリピン日系二世の戦後問題と就籍運動を中心に」『移民研究年報』22号、2016年、23-42頁。
- 沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編 第5巻（近代）』沖縄県教育委員会、2011年。
- 外務省通商局編『昭和十五年 海外在留邦人調査結果表』。
- 蒲原広二『ダバオ邦人開拓記』ダバオ：日比新聞社、1938年。
- 国立国会図書館図書部編『国立国会図書館著者名典拠録 明治以降日本人名 第2版』国立国会図書館、1991年。
- 小松ゆき『動きだした時計—ベトナム残留日本兵とその家族』めこん、2020年。
- 坂野徹『〈島〉の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』勁草書房、2019年。
- ダバオを愛する会・ダバオ会『会報 ダバオ』全69号（11号からダバオ会）、1965-2001年。
- ダバオ会編集部『ダバオ 懐かしの写真集』1988年。
- Davao Nikkei-Jin Kai, DAVAO NIKKEI-JIN KAI: SOUVENIR PROGRAM, 10 May 1980.
- 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典』2004年。
- 日外アソシエーツ編『日本人物レファレンス事典 商人・実業家・経営者篇』2017年。
- 『日比新聞』第1号、1935年10月1日。
- 日本移民学会編『日本人と海外移住—移民の歴史・現状・展望』明石書店、2018年。
- 橋本伸也編『紛争化させられる過去—アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』岩波書店、2018年。
- 早澤茂「1930・40年代日本人学校・在外指定学校の機能—フィリピン・ピコール地方を例として—」『都市文化研究』（大阪市立大学）Vol. 17, 2015年、52-67頁。
- 早瀬晋三『フィリピン行き渡航者調査（1901～39年）—外務省外交史料館文書「海外渡航者名簿」より—』京都大学東南アジア研究センター、文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No. 8, 1995年。
- 早瀬晋三『海域イスラーム社会の歴史—ミンダナオ・エスノヒストリー』岩波書店、2003年。
- 早瀬晋三『フィリピン近現代史のなかの日本人—植民地社会の形成と移民・商品—』東京大学出版会、2012年。
- 早瀬晋三『グローバル化する靖国問題—東南アジアからの問い』岩波書店、2018年a。
- 早瀬晋三「アキヒト皇太子・天皇のフィリピン訪問—『グローバル化する靖国問題—東南アジアからの問い』補論—」『アジア太平洋討究』第34号、2018年b10月、17-30頁。
- 早瀬晋三「引き続き「ベンゲット移民」の虚像—植民地都市バギオ、移民、戦争、そして歴史認識のすれ違い—」『アジア太平洋討究』第37号、2019年11月、1-48頁。
- フィリピン日系人友の会『日比友の会新聞』第1-2号、1984年3月1日-12月1日。
- フルカワ ヨシゾー『セカイ ヒトノゾキ』カワセ トシツグ、1930年（復刻版：『世界ひとのぞ記 1928年2月10日—1929年8月29日世界30ヵ国旅行記 昭和初期世界旅行記』滋賀県豊郷町：芙蓉会、2014年）。
- 古川義三『ダバオ開拓記』古川拓殖株式会社、1956年。
- 『まにら新聞』連載「戦後60年 慰霊碑巡礼第1部ダバオ・セブ編」2005年1月2-6日。
- 森谷裕美子「フィリピンにおける北部ルソン日系人社会の歴史的経験に関する研究」『大学研究助成アジア歴史研究報告書 2015年度』JFE21世紀財団、2016年、235-55頁。
- 山内由理子編『オーストラリア先住民と日本—先住民学・交流・表象』御茶の水書房、2014年。
- Hanlon, David, *Making Micronesia: A Political Biography of Tosiwo Nakayama*, Honolulu: University Hawai'i Press, 2014.
- Hayase, Shinzo, "Manila Hemp in World, Regional, National, and Local History," *Journal of Asia-Pacific Studies* (Waseda University) (『アジア太平洋討究』) No. 31, March 2018, pp. 171-88.
- Ohno, Shun, *Transforming Nikkeijin Identity and Citizenship: Untold Life Histories of Japanese Migrants and Their Descendants in the Philippines, 1903-2013*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2015.

資料

ダバオ会の会報『ダバオ』No. 32（1983年9月1日、59-65頁）に掲載された「ダバオの日本人墓地調査」および『ダバオ』No. 38（1986年8月1日、71頁）に掲載された「ダバオの日本人墓地調査（2）」を再掲載する。前者は、手書き原稿をダバオ会事務局に送り、編集部でワープロ入力したものが掲載された。入力ミスと思われるものは、[] で補った。後者は、残っていた原稿から改めて入力した。「○」は明らかに判読不明の字であり、はっきりしないものや字数のわからないものには「？」を付したが、ほかにもはっきりしないものが多々あった。

ダバオの日本人墓地調査

在オーストラリア 早瀬 晋三

ダバオの先亡日本人墓地が残っており、オーストラリアに在学中の早瀬晋三さんが墓地の調査をされた貴重なリストをダバオ会に寄せて下さいました。本来このような調査は領事館のやることです。ダバオにも領事館がありますが、この調査には協力もしてくれませんでした。早瀬さんがコツコツと残したこの貴重な資料は、無断転載することは出来ません。私達、ダバオを多くの方が訪問しております。ダバオに先亡者墓地があるのはよく知っておりますが、誰の墓地が何時建立され、何処にあるのか全く忘れ去られ無縁墓地化されているのです。この資料で先亡者墓地の存在を後世に残しておくために、早瀬さんにお断りして記載しました。

編集部

1982年5月8日調査

ダバオ日本人墓地

芦 本 熊五郎	大正12年1月29日没	享年50才
	香川県香川郡相紙村大字相紙	
荒 木 ヨ キ		享年64才
	佐賀県神埼郡千歳村	
石田兄弟 宰	昭和4年5月2日没	
登喜恵	昭和9年4月24日没	
入 江 長 平	昭和16年5月8日没	享年69才
	福岡県座賀郡祈尾町祈尾	
榎 本 義 石?	昭和12年6月13日没	享年28才
	北海道空知郡岩見沢町	
大 井 喜 助	昭和3年4月27日没	享年30才
	山口県仙崎	

大井 徳松夫妻		
カメノ	昭和7年9月18日没	享年60才
	山口県大津郡仙崎町	
大江 良道	大正13年9月4日没	享年37才
	広島県佐伯郡	
大島 清一	大正15年4月26日没	享年38才
	長野県上伊那郡片桐村	
角田 重兵衛	昭和13年6月3日没	享年47才
	福島県安達郡大山村棚村	
川島 晋	昭和5年8月21日没	享年3才
	福岡県久留米市東櫛原町1445	
高木 末○		
高木 直吉	昭和12年12月4日没	享年67才
	岐阜県安八郡和合村	
高山 トワ	大正13年6月15日没	
寺田 マサ	昭和3年12月2日没	享年38才
	長崎県草高○郡○○○○○	
西林夫妻 西林徳次郎	大正8年7月21日没	享年30才
コミツ	大正6年10月9日没	享年22才
	広島県安芸郡倉橋島村大字重生	
秦 恵吉	昭和14年11月26日没	享年32才
	福岡県糟屋郡香椎村釜下○	
浜野 真砂子	昭和7年4月23日没	
早苗	昭和12年10月24日没	
	和歌山県西牟婁郡田並村大字田並 浜野栄蔵娘	
藤野 正	昭和13年8月31日没	享年25才
	福岡県粕屋郡仲原村大字阿忠	
増田 梅次郎	昭和6年5月21日没	
増田 道儒	昭和5年9月27日没	
村上 忠二	昭和13年11月28日没	享年46才
	京都府天田郡福知山市字内記	
吉崎 祐行	昭和5年6月15日没	
	富山県中新川郡舟橋村竹鼻	
○ 辺 一平	? 1月4日没	
純ちゃん	?	

ミントル墓地

青 根 外世子	昭和9年3月5日没	享年2才	
	滋賀県東浅井郡竹生村		
安 斉 包	大正9年8月6日没	享年32才	
	福島県安達郡上川崎村〇〇〇〇		
石 神 角太郎	昭和5年10月17日没	享年33才	
	岐阜県郡〇郡西和良村		
市 来 勝 美	大正15年4月1日没	享年1才	市来留吉長男
	鹿児島県始良郡国分町府中		
出 井 ノ ブ	昭和12年8月5日没	享年32才	
	栃木県下都賀郡国府村字大塚		
稲 垣 克 子	昭和8年4月12日没	享年2才	
	愛媛県北宇和郡三間村字土居中		
上 繁 一 (長男)	大正12年4月22日? 没	享年1才	
	島根県邑智郡阿須郡村字雲田		
牛 島 清 之	昭和2年1月24日没	享年46才	
	熊本県八代郡植柳大字植柳		
内 田 五十八	大正14年6月27日没	享年2才	
トミ子	大正15年5月5日没	享年1才	
	山口県大島郡平野村		
梅 宮 マ サ	昭和10年3月〇日没	享年37才	
	福島県〇会郡?		
浦 住 吉 蔵	昭和4年6月26日没	享年31才	
	福島県伊達郡月館町		
大 城 孝 蔵	昭和10年10月31日没		
太 田 雪 子	大正15年5月9日没	享年19才	
大 東 万 郎	大正6年8月14日没	享年26才	
	滋賀県野洲郡北里村野		
津 田 乙 松	大正9年5月20日没	享年20才	
	滋賀県野洲郡河西村甲		
岡 田 末 武	大正10年6月13日没	享年22才	
	山口県		
岡 村 昭 蔵	昭和3年8月29日没		
落 合 仁 市	昭和7年5月31日没	享年32才	
長男 真 一	昭和4年6月10日没	享年1才	
	広島県〇三郡三良坂町字大田に [大谷]		

数 井 豊次郎	昭和9年10月6日没	享年36才
	富山県婦負郡朝日村友○	
香 次 ○ ○	大正10年 ? 没	
日下部 正 義	昭和5年9月18日没	享年20才
	福島県安達郡獄下村大字○○字沓形	
国 近 祐三郎	昭和5年8月14日没	
	広島県尾道市久保町83	
高 寺 邦 敏	昭和3年2月10日没	高寺邦保長男
小 平 次 雄 (夫)		享年33才
政 子 (妻)	昭和3年10月7日没	享年23才
	長野県南安曇郡穂高町	
小 玉 琢	昭和7年3月28日没	享年4才
	福井県坂井郡鷹巣村	
昆 茂 乃	昭和13年10月29日没	
雅 代	昭和12年7月2日没	
	新潟県中蒲原郡新沢村字大安寺	
佐々木 恒 夫	昭和3年8月1日没	
島 田 伝 吉	大正13年10月○日没	享年35才
	富山県人	
瀬 戸 清次郎	昭和2年1月1日没	
	和歌山県 明治5年12月13日生	
谷 川 福一郎	昭和9年5月28日没	
永 田 伝三郎	昭和6年8月10日没	享年46才
	岐阜県郡上郡西和良村小郡北	
中 堅 秋 作?	大正7年4月1日没	享年19才
成 富 元 吉長女	昭和10年7月6日没	
野 中 夕 ケ	昭和2年8月30日没	享年21才
	佐賀県神埼郡三田川村大字箱川字角田	
橋 詰 清太郎	大正9年11月26日没	享年21才
	石川県人	
林 敦 美	昭和4年5月17日没	享年25才
	群馬県前橋市荻町185	
原 口 信 道	大正9年7月26日没	享年21才
	佐賀県養基郡北茂○	
平 尾 茂 之	昭和9年4月7日没	享年11才
G e p r i a n o H i r a o		
平 栗 諫	昭和7年9月20日没	

マ キ	昭和3年2月6日没	
	福島県安達郡大山村大字○山字平沢川	
平 山 茂 逸	昭和6年2月10日没	享年64才
	山口県宇部市	
広 江 国 資	昭和9年7月14日没	享年46才
	東京府	
広 野 吉 助	昭和8年4月11日没	享年28才
	和歌山県西○寿郡福原村	
増 田 四 郎	昭和3年12月8日没	享年34才
	奈良県吉野郡賀名生村	
村 沢 こ と	昭和5年6月15日没	享年34才
	長野県更級郡川中島村	
森 広 男	昭和10年9月27日没	享年44才
	広島市竹屋町	
吉 川 米 造	大正15年4月24日没	享年40才
	滋賀県東浅井郡竹生村大字早崎	
脇 坂 房 子	昭和4年2月11日没	享年3才
	福島県双葉郡請戸村大字中○	
渡 辺 西 吉	昭和15年11月29日没	
	福島安達郡白岩村字稲沢	
渡 辺 幸 之	昭和3年6月13日没	享年48才
	福岡県遠賀郡水巻村頃末	
実 誉 一 道	大正8年1月8日没	
	佐賀県三養基郡旭村 執行実一	
○ 川 小 ○	昭和5年3月8日没	享年31才
	佐賀県三養基郡北茂安村白壁	
○ 中 涌太郎 長男	昭和10年2月22日没	享年1才
？ 子	昭和13年2月5日没	享年2才 大谷領一次女
Ana Pulido	昭和5年6月10日没	享年45才
	鹿児島県人坂元万○○之妻	
Hiyan Ipai	大正15年5月23日没	享年30才
斉 藤 光	大正6年1月21日没	享年2才
斉 藤 若 人	大正15年9月23日没	享年3才
斉 藤 久	大正15年5月21日没	享年4才
サンテアゴウ パラド夫婦之墓		
サンテアゴウ パラド	昭和2年5月27日没	享年37才
オヨグ	大正12年1月22日没	享年28才

在留先亡同胞霊塔 昭和3年4月 有志建立

平野村人之墓 清 吉 大正8年3月3日没 享年28才

春 実 大正8年1月15日没

勝 治 大正7年9月30日没

作兵衛 大正8年1月5日没

昭和4年8月 福島県信夫郡平野村村人一同発企建之

太田興業株式会社社員従業員之墓 昭和6年2月10日再建

先亡平田村人之墓

福島県信夫郡平田村 昭和11年3月21日建之

鈴木 重 吉 大正6年4月没 享年33才

野 地 ？ 大正7年8月没 享年29才

菅 野 宇 兵 大正7年8月没 享年24才

菅 野 金 平 大正7年9月没 享年26才

？ 大正8年5月没 享年23才

？ 大正8年9月没 享年24才

？ 大正9年5月没 享年24才

同郷在留先亡朋友之墓

福島県信夫郡渡利村々人一同 昭和12年12月5日建之

菅 野 右エ門 大正7年3月12日没 享年23才

菅 野 吉次郎 大正7年7月18日没 享年21才

山 岸 友 吉 昭和11年1月11日没 享年24才

菅 野 明 雄 昭和11年12月16日没 享年3才

菅 野 富紀子 昭和12年6月24日没 享年1才

三州人先亡社〔者〕慰霊碑 ダバオ三州〔人〕会 紀元2600年

先亡長野県人之墓

トリル

島 袋 誠 一 昭和15年6月16日没

沖縄県中須郡中須村

仲 間 正 次 昭和9年4月4日没 享年1才

中 山 昌

根 本 長 介

古屋野 博 昭和13年6月3日没 享年24才
岡山県倉敷市平田411
古川拓殖株式会社入社 昭和12年4月18日
渡辺 主税 昭和10年1月〇日没 享年41才
福岡県企救郡企救村

全体を通じて、不鮮明箇所多し。 1982年5月20日作成

@早瀬 晋三

無断転載を禁ず

ダバオの日本人墓地調査（2）

早瀬 晋三

バンカス墓地 1985年6月21日調査

○山口県大島郡家室西方村字外入

大正7年7月14日没

行年25才

昭和5年10月バンカス耕地山口県人建立

○松並軍一之墓

○大正7年10月6日卒

行年30才

○石田重介之墓

全ての墓が倒されており、墓の片面しか読みとることが出来なかった。バンカス墓地は、全く手入れされておらず、雑木林の中にある。この他、シリブにも日本人の墓が数基あるらしいが、雑草が繁茂し、探し出すことが出来なかった。

「ダバオの日本人墓地調査（2）」掲載後すぐに、最後の石田重介について、亡くなったときのことを覚えていた雇用主の娘から手紙があり、存命中の母親と話して、昭和3年に「マニラ麻の植え付の終った農園に一人で草取り行き仕事中に近所に住むモロ族〔イスラーム教徒〕の男三人にボロ〔蛮刀〕で切り殺された」ことがわかった。

なお、「墓地調査」以外で『ダバオ』に掲載されたものは以下の通りで、「渡航者名簿」については、ダバオに残された日系人が、父親が日本人であることを証明する手がかりになるのではないかと思い紹介した。その後、外務省外交史料館で調査する関係者を見かけるようになり、問いあわせもきた。だが、電話や携帯電話のメールでの問い合わせで、文書による依頼をお願いしたが、文書によるものはなかった。そのころ、日系人労働者をリクルートする違法ブローカーが暗躍しているとの話が聞こ

えてきていた。

「ダバオ・フロンティア物語」『ダバオ』（ダバオ会）連載。

「第1話：ダバオ邦人移民の起源」No. 32（1983年9月1日）pp. 75-78.

「第2話：ベンゲット道路工事とダバオ邦人移民」No. 33（1984年3月1日）pp. 86-89.

『Filipica』（フィリピンに学ぶ会）第19号（1985年10月）pp. 24-28に転載。

「第3話：太田恭三郎と太田興業株式会社の設立」No. 34（1984年9月1日）pp. 68-71.

「第4話：マニラ麻とダバオ」No. 35（1985年3月1日）pp. 60-63.

「第5話：ダバオとアメリカ製鋼業界」No. 36（1985年9月1日）pp. 56-59.

「第6話：バゴボ族」No. 38（1986年8月1日）pp. 68-71.

「ダバオ行き渡航者名簿Ⅰ（明治43～44年）—外務省外交史料館文書『移民取扱人ヲ經由セル海外渡航者名簿』より」『ダバオ』No. 46（1990年9月1日）pp. 49-53.

「ダバオ行き渡航者名簿Ⅱ（明治45／大正元年）—外務省外交史料館文書『移民取扱人ヲ經由セル海外渡航者名簿』より」『ダバオ』No. 47（1991年3月1日）pp. 127-33.